



## 父母交替

昭和七年(1932年)に父が死に、なか二年おいて幼稚園児の弟と母とが世を去った。

祖母と姉・妹、そして眼疾療養中の私とが残された。もちろん「寺」なのでご門徒へのつとめが停滞してしまったことでもある。

それに亡き母の代から「庫裡」(寺族の住居)の建て替え事業が進行中でもあった。次期の住職、つまり次の父母なる人が当然要請された。しかしそれは極ごく自然に運ばれた。

父の弟夫婦が、福知山で寺の住職として養子に入っていた。しかも眼病の私をここ二年そこに預かって養育してくれていた。

養子縁組を離脱してこの夫婦が勝林寺十八世の住職・坊守となつて出石に帰ってきた。(丁度療養中の私も退院する時期になつた)。

私は以前からの行きがかりもあつて、なんのわだかまりもなく「ちち・はは」になじめたが、おんなの姉妹は馴染めないものを長く残したものであつた。

当時の勝林寺の堂宇は、明治三十年前後ころに「坪口」から転居してきた當時のままであった。本堂こそ新築であったが庫裡は幕藩時代の豪商の住宅かなにかを少し手入れして入っていた。だから本堂が建つまでの間の名残だろうか、家の中央は二階まで大きく突き抜けていた。そこには長くご本尊を収める「空殿」が設けられていたのだろう。しかしとにかく大きな間取りの二階建の馬鹿デッカ

イ古屋であった。庫裡のたたずまいも大きかつたが、暮らしている人も多かった。

祖母・父母・きょうだい、六人の外にもいろいろの人が暮らしていた。

先ず、「役僧」。住職不在のあいだその代務としてご門徒のつとめをしてくれる人。わたしが覚えているだけでも一・三人交替した。

わたしの教育係でもあった。みな青年僧侶であつて、だからお勉強だけでなく遊び。大正琴、それに畠仕事など諸般にわたつて競けてくれた。

阿弥陀さまのお姿が極彩色で印刷された表紙の部厚な本をもつていて、ご法義(おみのり)の歌をわたしはこの人から伝授された。なにしろ仏教用語や古語で構成される七五調四行の唄で、調子がよかつたせいかメロディーだけはすぐに覚えたが、中身はスッカリ忘れて覚えていない。

今になつて思うのだが、あの唄、ご開山親鸞さまの最晩年の作「三帖和讃」の系統を引いているのではないか。

親鸞は京都へ帰つてから孤独であつた。関東で育てた弟子の多くは親鸞の意に反しておれの念佛集団の保身に傾いて行つた。わが子善鸞からも背かれ義絶せざるをえない苦渋をなめさせられた。京都の仏教界も法師たちも全体「法師とよぶもうきこと」と悲嘆せざるを得ない状態。その孤独な老境の親鸞が、「御同行(おともどう)」としてともに仏教を歎びあえたのは、「文字のこころもしらず、愚痴きわまりなき」田舎の庶民たちであった。

その人たちと歎びあえる歌「和讃」を親鸞は繰りつくようないで次々に歌い出した。五百首を越えるこの唄には、老いた親鸞の汲めどもつきない思いが聞こえてくる。

それだけではない。親鸞以後、ことに蓮如以後のご法義は、ご門主や宗門僧侶のようないいいろいお鳩

専門職の説教ではなく、「役僧」・「先達」

「お同行」・「講長さん」とよばれた人達の「ご和讃風の讀歎のうた」が中心ではなかつたのか。昭和初期まで、これらの唄を歌いながら村々の「お講さん」などの集会を渡りあっていたそうした方たちのいたことを記憶している。親鸞の遺風「淨土真宗」は、そういうかたちで生きてきたのだと思つ。

## 金子みすゞのうた

### お魚

三日(日)	光顕寺 永代経
九日(土)	親鸞聖人七五〇回大遠忌法要 出石組団体参拝
二日(土)	坪木隆晴宅 七回忌

二日(土)	坪木隆晴宅 七回忌
二日(土)	組会 午後二時より

四月 勝林寺 予定

出石組団体参拝

一〇日(日) 湯口 裕宅 一二三回忌

一六日(土) 勝林寺 観桜会 午後二時より

一七日(日) 中島武志宅 13・17回忌

一八日(月) 濱 嘉子宅 二五回忌

二四日(日) 宮嶋寿賀雄宅 一三回忌

二六日(土) みのりを聞く会 七時半より

二九日(金) 藤川貴恵宅 七回忌

三〇日(土) 湯口修次宅 三回忌

三月二十六日

## 葬儀

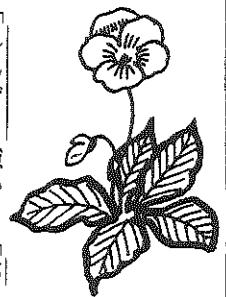
山田 ゆみ 正法寺

田村 輝夫 上小田さま

九十四歳

八十六歳

## 辛抱と我慢



よく似た言葉です。「しんぼう強い」「がまん強い」。どちらも褒め言葉として同じ意味に使われていますが、もともと全く意味の違った言葉です。

「辛抱」は、つら（辛）いことも心のなかりにグット抱きこんでことばにも表情にも出さず、強く生きることを「辛抱づよい人」。

「我慢」は、「慢」はももと「慢じる」「慢する」と使い、（たかぶる・ひとつをあなどる）という意味に使ってきました。

仏教では、なかでもお釈迦さまのお弟子たちひらいた唯識教学では、自己の生きざまを分析反省して「我慢」を始とする七つの「慢」を数えています。

たとえば「慢」。総じて人を見下す差別するしかたで自分の優位を主張する。

「過慢」。同僚の者の中でもあいつより俺が上だ。

「慢過慢」。上のものに対しても、あいつ偉そうにしているが、もともと俺の部下だったんだ。

総じて「我慢」。

次ぎに「増上慢」。釈迦もキリストも同じ人間、今いきてる俺が一番。

「邪慢」。姻祠邪教・異端宗派の開祖まがいの独りよがりの独善者。

「卑下慢（ひげまん）」というのもあります。いかにも謙虚に、へりくだつたような素振りによって、陰で人を差別し己を高ぶっているやりかた。うわべでは人様を持ち上げ、心中ではせせら笑いながら自分を目立たせようとする自己顯示欲（目立ちたがりや）の強い人。

このように挙げると、「あ々、ほんとほんと、うちの職場にもそんな嫌らしい人いるよ」と人事のように受け取りがちですが。仏教ではあくまでもこれは、「自己省察」「自己反省」です。

蓮如上人は「仏法は無我にて候」と喝破なさいました。道元様も「自己を忘れること」が仏道を習うことだとおっしゃいました。

私が悟るために座禅ではない。私が人を救うために念仏するのではない。私が往生するための修業はダメ。

日常私たちのくらしは、「私は」こう考える「私はこの道を行く」、「私の建てた家」、「私の積んだ財産」。「私の経験から得た智慧」。「私のものを人へ施す」というところで成り立っているのではないか。

そしてそれはまた、私のものはAさんのものより高価だ。Bさんより上位だ。すべて自己中心。そして他と比較し、競争し、結果、比較しました競争し差別しあって勝ちぬいていこうとする。

そもそも「自己」とは何なのか。わたしにはほんとうの「自己」が見えていいのか。

ここを徹底探求した人がお釈迦さま。ほんとうは何も見えていない「無明（むみょう）」が現実。見えてないばかりか、見えていない「自己」に、渴いたものが水をガツガツ欲するように「渴愛（かつあい）」かかわり執着する。

その「無明と渴愛」こそが煩惱（まよい）の根本ではないか。

（法）とは何か。

一 この続きは次号で――

西のお空は  
あかね色、  
あかいお日さま  
海のなか。

東のお空  
真珠いろ、  
まるい、黄色い  
お月さま。

日ぐれに落ちた  
お日さまと、  
夜あけに沈む  
お月さま、  
逢うたは深い  
海の底。

月日日月

雀のかあさん

子雀が  
つかまえた。

雀のかあさん  
笑ってた。  
それみてた。

お屋根で  
鳴かずに  
それ見てた。

ある日  
漁師にひろわれて  
赤とうす黄の

月日貝。

西のお空は  
あかね色、  
あかいお日さま  
海のなか。

東のお空  
真珠いろ、  
まるい、黄色い  
お月さま。

日ぐれに落ちた  
お日さまと、  
夜あけに沈む  
お月さま、  
逢うたは深い  
海の底。

月日日月

## 勝林寺

### 春季研修会（観桜会）

#### ご案内

実施日：平成23年4月16日（土曜日）

##### 第一部 囲碁ボーリング大会

2:00 ゲーム開始  
2~3ゲームします  
会費：無料  
場所：勝林寺 本堂

##### 第二部 研修会・観桜会

4:30 受け付け  
5:00 おつとめ・法話  
6:00 観桜懇親会  
8:00 終了  
  
会費：  
男・1500円  
女・1300円

<<参加申込先：仏婦評議委員>>

申込締切：4月13日（水曜日）

小さな子ども  
簡単に出来る楽しいゲーム  
子ども達も一緒にみなさん  
かるつてご参加ください

